

# 古代と中世の城と館—高屋敷館から浪岡城へ—

工藤清泰（東北中世考古学会会長）

はじめに—古代と中世—

- 1 遺跡としての城と館
- 2 壕のある遺跡の出現と意味
- 3 「曲輪を並べる」中世城館—浪岡城の姿—
- 4 海（街）道と城館

おわりに—城館をみる視点—

## はじめに—古代と中世—

入間田宣夫先生の名著『日本の歴史⑦ 武者の世に』（1991年 集英社）は、図版も豊富で東北地方北部（青森・秋田・岩手）の古代中世社会に立脚して全国的な視点、いや東アジア的視点から叙述した概説書で、第2章は「未開から文明」の標題がついている。おそらく、先生は未開的状况を遺す古代と文明的状况に移行する中世を、時代区分の大枠と考え、「アジアのなかの日本、辺境の島国」と「日本のなかの東国、辺境の未開社会」を叙述の基盤とした上で、「武者の世」（兵の時代）の勃興が辺境から始まり、その動きが中世を規定すると考えておられた。そして考古遺物である「銭」「陶磁器」などを示しながら、文明化する「文字社会」を日本列島の歴史事象として示してゆく。学ぶところ大であった。

その後、『北日本中世社会史論』（2005年 吉川弘文館）では、「北の辺境から日本史を見直したい」との気持ちから「北奥や奥六郡・山北三郡を新旧の境界領域として、その特別な位置付け」を提示するに至ると、「二十世紀後半まで支配的であった国家本位の歴史像、中央からの歴史像に代わって、地域住民本位の歴史像、わけても辺境からの歴史像」の叙述が可能になったとしている（下線筆者）。さらに安斎正人氏とともに監修した『北から生まれた中世日本』（2012年 古志書院）は、入間田先生既存論文の標題そのものを使った書名であるが、その中で「延久二年北奥合戦の勃発した1070年には、京都一極集中を基調とする律令的な統治の外延的な拡大が極限にまで達することによって、一転して、新しい「中世のかたち」が生み出されることになる「臨界点」にまで、すなわち列島における古代から転じて中世が生み出されることになる「臨界点」にまで達していた。（下線筆者）」と提起する。前段では「清原真衡は、その居館が「館」（たち）と記されたことが知られる最初の人物」として、中世成立における北からのパワーを強調している（以上、同書所収の入間田宣夫論文「安部・清原・藤原政権の成立史を組み直す」）。

私が20～30代に発掘調査をした史跡浪岡城跡は、古代から中世を主体とする遺跡であった。一般的にいわれる古代の遺跡では、若干の竪穴建物跡と周溝約21基などから10～11世紀の土師器・須恵器等が出土、ただし史跡整備の関係から古代の遺構をすべて調査したわけ

ではない。そしていわゆる中世の段階になると、12世紀後半の白磁四耳壺・同碗・常滑壺・珠洲甕とともに「かわらけ（てづくね・ロクロ成形）」も出土して、この段階と想定される壕跡も発見したが、戦国期の堀跡などに破壊されていたため、明瞭な状態で確認することはできなかった。そして、史跡指定の対象であった15世紀後半から16世紀末（一部17世紀初頭）までの建物跡（掘立柱建物跡・竪穴建物跡）や構築物（井戸跡など）は、良好な状態で残っていたため調査報告書等で成果を提示した<sup>1</sup>。

この時代が重なり合う遺跡の調査以来、私は、考古学研究の中で「古代と中世をどこで区分するか」という宿題をいただいた。

考古学資料は、出土資料という属性からすれば「地域住民本位の歴史」を示すものであり、広域流通品であっても生産—流通—使用—廃棄（埋納）の一連の動きの中で、最後は大地の出土となるから、土地に根ざした住民資料である。

また、入間田先生が示した境界領域「北奥（新）」と「山北三郡（旧）」の地域性は、「城館」という遺跡をみる上でも重要な視点である。今回は、そのことに主眼を置いて私がフィールドとしていた津軽（とくに浪岡地域）の事例紹介をする。「山北三郡」という地域研究に資することがあれば幸甚である。

## 1 遺跡としての城と館

私は、城（じょう・しろ）も館（かん・たて）も遺跡のひとつとみている。

浪岡城跡の調査から得た考え方として、城館は「東アジア的な視点に立てば集落から都市的な発展の一歴史階程（梯）の構造物」と捉えるに至った<sup>2</sup>。後に、故石井進氏は旧浪岡町（現青森市）で行われた講演で「中世の城とは決して単なる軍事的要塞というだけでのものでない。むしろ中世における集落、都市の一種である。」と述べ、浪岡城跡をはじめとする城館は、中世という時代の特色を明らかにする「遺跡」であると示していただいた<sup>3</sup>。

城は、中国における「城郭」「城市」「城塞」等を源として、すこぶる中国的概念の入った言葉で、日本的音韻では「代（しろ）」（苗代・代田）のように区画性を有する構造物と捉えることができ、古代から中世を経て日本的空間構成を示す言葉になった、と考えている。

中世の遺跡を代表する「館（たて）」と呼ばれる遺跡の出自については、各方面から注目されているにもかかわらず、現代に至っても明確な回答を出すことが難しい。「館」は、古く『和名類聚抄』においては「たち」と訓まれ、また「むろつみ」とも訓まれる<sup>4</sup>。「たち」から「たて」への変化を「楯」から転化したものと考えると「軍営」の意味が強くなるが、「たち」そのものに「庁」の意味が内在しているところを見ると「楯」が本来的表記で「館」の使用の拡大に伴い「某館」につながったと考えることもできる<sup>5</sup>。「たて」という音は現在でも「立」の文字を使って「結



納立」「柱立（地鎮祭）」などで使用され、「ハレ」の場を強く意識した場面で使用する例が多い。

一方の「むろつみ」に関する考察は極めて少ない。「むろつみ」の意味を、白川静の『字訓』を参考にして考えると「室（むろ）」＋「積む・集む（つむ）」に想定できる。つまり、室・窟という堅穴建物や倉庫群の集合体を表す語としての認識にいたる。一般的に軍営という意味に解するが、日本的音意から受ける印象は住居ないしは同類の施設の集合体の感が強いし、「客舎なり」とする意味も含めると客人をもてなすエリアと考えることもできる。集落は、「村」「邑」（群れを源義とする）の語をあてることが多いから、一般集落と「むろつみ」なる遺跡には相違が存在することになり、発掘調査によって現れる場合どのような遺跡を想定できるであろうか。

ここに区画施設の問題が出てくる。弥生時代の環壕集落から古墳時代の豪族居館、そして奈良平安時代の城柵・官衙遺跡まで、これらの遺跡に特有な区画施設は、それまで空間や大地を区画するという思想が無かった人々にとって、どのように写った施設であろうか。区画施設の性格を防御的と見ようが、政庁的あるいは宗教的と見ようが、現代人の感覚を一度切り捨て、当時の人々が感じていた視点で「遺跡」の評価をしなければならない。

「城柵」を軍事施設と捉えていた時代から官衙的施設も兼ね備えるという認識に至った現在、考古学の果たした役割の大きさを思う時、北奥における古代の「壕のある遺跡」、環壕集落を単純に「防御性集落」と呼んでいいものだろうか。

さらに、このような「環壕集落」に関して、その施設を構築した人々の感覚や意志（記録）はまったく存在せず、ただ考古学的事実だけが地域住民本位の歴史像を代弁している。つまり古代の人々の感覚を大切にしながら歴史事象をみようとしても、当地以外で作成された文献記載の視点がつきまとい、文献に考古学資料を合せることが多く、考古学独自の概念を敲いてこなかった事実ある。それゆえ、地域住民本位の歴史像を求めるためには、文字記録を残さなかった人々の側に立った歴史考察が求められる。ただし概念は、文字によって構成されるから、文献史学の研究は常に尊重し参考にしなければならない<sup>6</sup>。

## 2 壕のある遺跡の出現と意味

「**壕のある遺跡**」は古代か中世か 管見の範囲で、日本列島の中で壕をもつ遺跡の出現は北海道苫小牧市「静川 16 遺跡」を嚆矢とする。時期は縄紋時代中期末（約 4,000 年前）、壕の全長は 128.5m、上幅 2～3m、深さ 1～1.8m で内部に 2 軒の堅穴建物跡があり、南側の丘陵には 20 軒以上の堅穴建物跡のある集落が営まれている。仮に、この遺跡の環壕部分だけを写真で示して、縄紋時代の年代を教えなければ、中世の城館と見る人もいるかもしれない（図 1）。それだけ、この環壕は立派である。環壕の機能については<sup>7</sup>、公共的行事、祭祀、

儀礼など非日常的空間を表象する考えや、北海道に生息しないイノシシを飼育する空間などを想定しているが、やはり、集落域と別な空間域を構成していることが重要である。

その後、弥生時代の環濠集落、古墳時代の前方後円墳や豪族居館などで環濠（濠）をイメージできるが、東北地方北部においては律令国家成立以後、築地（一種の土塁）や柵列（一種の区画塀）を巡らす遺跡と大地を人力で掘り上げた「濠のある遺跡」、そしてその合体形が出現



北から見た環濠

図1 静川16遺跡の環濠写真

してくる。いずれにしても、北奥の「環濠集落」と山北三郡における「館」は、平安時代における「濠のある遺跡」との評価を与えられるものであり、いかなる要因でこれらの遺跡が出現してくるのか興味深い。

考古学の対場から、中世のはじまりを9世紀第2四半期と考えたのは水澤幸一である<sup>8</sup>。水澤は、石井進ら中世史研究者の律令国家に対する考え方を検証したうえで、宇野隆夫や吉岡康暢等が食器様式の画期とした「9世紀中葉から10世紀初頭」の転換期を考察し、王朝国家的食器様式（中世的食器様式）出現を考古学的中世のはじまりと捉えた。キーワードは「商品的流通」段階であり、もちろん汎日本的に始まったのではなく、地域的相違は存在することを前提としていた。

これまで考古学研究でも漠然と古代に区分していた「9世紀中頃」以降を中世とみた場合、この時期の前後では、北日本地域においても特色ある変化をみることができる。例えば、末期古墳の終息と円形周溝（墓）の成立、王朝国家的食器様式の波及と擦紋土器の成立、集落遺跡の急増、墨書土器の出現、五所川原須恵器窯の開窯と刻書土器、鉄製品の普及、生業として稲作・雑穀・製塩・鉄生産・漆器生産・馬産の拡大、そして「濠のある遺跡」つまり「環濠集落」の成立である。

仮に、「濠のある遺跡」を城館の範疇に入れるとすれば、その出自、発生要因を検討しなければならない。私はかつて、境界観念の成立から古代城柵をモデルにしていると推測して、畿内律令国家の北進が大きな影響を与え、在地住民の意識に濠を掘る（地業的）結界を成立させたと考えたことがある<sup>9</sup>。さらに集落のあり方を検討すると最初に成立する「濠のある遺跡」は、錫杖状鉄製品の出土などから宗教的意識を濃厚に示し、交易の活性化、商業経済の進展によって「環濠集落」自体も拡大する見通しを立てた<sup>10</sup>。つまり、集落的様相を含みながら、継続する北奥の中世城館（都市的様相）に繋がる考古資料群を示していることから、「館」の原形と考えたのである。

これに対して「濠のある遺跡」を国家史的視点からみた場合、郡制未施行地、王朝国家の領域ではなく一種の「境界領域（辺境という言い方をする人もいるが）」的遺跡の地域特性を与えたうえで、部族間抗争の拠点遺跡を表す「防御性集落」の評価を受けていた。



その具体的実態は、三浦圭介・小口雅史・斉藤利男編『北の防禦性集落と激動の時代』(2006年 同成社)の中で、主な遺跡の概要が示され、主要研究者の議論や論文も掲載されている。ただし、この遺跡の形成年代は研究者によって相違があったし、今もある。

三浦圭介(10世紀第3四半期～12世紀第1四半期：地域によって相違あり)・工藤雅樹(～10世紀末から11世紀初頭が最盛期：12世紀初頭で消滅)・高橋学(10世紀半ば成立：地域によっては9世紀後半代)・八木光則(～11世紀前葉で終末)各氏の見解の相違は、基準となる土器編年観の相違であって、おおむね10世紀後半までに成立することでは一致し、八木氏以外は10世紀後半から11世紀を中心とした考え方である。

11世紀といえば「清原氏の時代」である。

**高屋敷館遺跡の特色** ここでは北奥で唯一、11世紀の遺跡として国史跡となった高屋敷館遺跡の事例をみることにしたい。

高屋敷館遺跡は、青森市浪岡大字高屋敷字野尻他に位置、大釈迦川西岸の梵珠山地に連なる標高35～45mの段丘上に立地する。遺跡の調査は、国道7号浪岡バイパス建設事業に先立って、1994・95年(平成6・7)に青森県埋蔵文化財調査センター、2005・06年(平成17・18)浪岡町教育委員



図2 高屋敷館遺跡空中写真(平成8年)

会・青森市教育委員会によって実施された。県埋文センターの対象は、壕と土塁で囲まれた南北80m、東西57mの約3,400㎡であり、中世城館の認識のもと調査に入ったところ、結果は古代の環壕集落であった。中里城遺跡のように中世城館と重複する古代の壕を有する集落の調査はあったものの、土塁と環壕(図2)の保存の良さ、そして環壕内の建物配置、出土遺物から想定される生活や生産のあり方、さらに交流の在り方が理解できる稀有な遺跡であった。同時期の三内丸山遺跡の保存運動とも連動して、古代エミシ社会を理解するうえで重要な遺跡と評価されたため、2001年(平成13)1月に国史跡指定を受けた。そして、2005・06年の調査は史跡指定後の環境整備を目的とした遺構確認調査で、柵と想定される柱穴列(溝)や、門・通路の発見があった。

区画に係る遺構としては、土塁とそれに対応する環壕、出入口3か所及び環壕に残存していた橋脚跡がある。また生産・生活に関する遺構としては、竪穴建物跡(75棟)、鉄関連遺構(2基)、工房跡(1棟)、掘立柱建物跡(1棟)、土坑(42基)、井戸状遺構(2基)、溝跡(11条)、道路状遺構(1条)、焼土遺構(1基)などが検出された。

土塁と環壕は、南北の小さな沢に挟まれた河岸台地を取り囲むように構築され、壕の外側に土塁を巡らす構造、いわゆる内環壕で、土塁は壕の掘り上げた土を盛って造られている（図3）。

土塁の基部底部は2.1m、高さ約1mで、全長は188mである。壕は、幅5.5～6.2m、深さ2.8～3.5m、土塁頂部からの壕幅は約8m、深さ約4.5～5.5mの規模である。壕の全長は土塁全長より長く約214mである。壕の掘り方は全般に逆台形状（一種の箱薬研的な壕）で、一部V字状（薬研堀）を呈し、部分的には掘り直しをしている箇所が存在する。当時の地表面であった黒色土の上に黄色の地山が盛られており、降下火山灰（BT-m白頭山苦小牧）の関係から土塁に関しては10世紀中頃以後に盛られたと推定できる。壕の構築時期も同時期と推定できるが、堆積土から2時期の埋め戻しが確認でき、出土遺物の面からも壕の成立は10世紀末以降で、11世紀が土塁・環壕の主体時期である。12世紀中頃には壕は埋め戻されていると推定される。

出入口は3か所に認められ、当初の調査区からはずれた西側中央、壕底から橋脚（図4）と思われる四本の木柱を検出した南東角付近、土塁の食い違いが見られる北側部分で壕の壁や底には橋脚跡と思われる柱穴痕が存在する。これらの出入口に関しては、当初北側に存在していたものが、いつの頃から閉鎖され、以後西側中央と南東角付近の二ヶ所が出入口として使われていたと想定されている。西側中央に関しては、浪岡町教育委員会の調査で橋脚と門跡の可能性のある遺構を検出している。

竪穴建物跡は、重複が激しく4～5期の変遷が想定され、一時期に10軒ほどの竪穴建物跡が存在したと推定される。規模は、



図3 高屋敷館遺跡土塁と環壕



図4 南東から発見された4本の橋脚



図5 出土土器類



一辺が4～5mが多く8m前後の大型竪穴建物跡も数軒発見されている。年代は9世紀後半から11世紀までであり、後半の建物は壁柱穴といわれる壁際に沿って30～50cm間隔の柱穴配置を示す例が多い。

鍛冶遺構は環壕内部の北側地域から2棟検出されており、1棟は鋼精錬、もう1棟は鉄器鍛造（鍛冶）を行っていた可能性がある。

井戸状遺構は、環壕内のほぼ中央と南側環壕に接して2基検出しており、形状は円形、深さ2m前後で木枠等は発見されていない。

出土遺物には土器類（土師器・須恵器・擦紋土器など）、土製品（土玉・勾玉・土錘・羽口・支脚など）、鉄製品（鉄斧・刀子・鎌・鋤先・紡錘車・鉄鏃・錫杖状鉄製品・鍋破片など）、銅製品（銅碗・用途不明製品）、木製品（菰槌・堅杵・箸状木製品・椀・板状木製品・橋梁木柱など）、石製品（基石？・砥石）、鉄滓、鍛造剥片がある。

土師器の器種（図5）としては、甕・坏・壺・埴・把手付土器・内耳土器・片口土器そして壺形土器があり、量的には甕の破片が多い。把手付土器、内耳土器、片口土器は金属製品を模倣した土器で、11世紀から12世紀の標識となる可能性が高い（図6）。また、北方由来の擦紋土器は擦紋期後半の刻線を付けた甕形製品である。

鉄製品には農耕具である鋤先・鎌・苧引金と武具である鉄鏃（鑿根と雁股の形）そして工具である鉄斧・紡錘車・刀子などの他、宗教具と推定される錫杖状鉄製品が見られる。

銅製品として、銅碗の破片は厚さ0.25mmで4枚が重なるように出土し、仏具で使用される佐波理碗といわれるものに類似する。

木製品のうち、菰槌・堅杵は農耕やそれと連続する生産に関連した用具であり、遺跡の生産構造に農耕が存在したことを強く印象づける。橋梁から発見された木柱は、年輪年代測定によると1106年と1101年の伐採年代になっており、橋梁が数十年存在したとすると、12世紀前葉まで遺跡が存続

したことになる。青森県内の12世紀前半の遺跡は、ほとんど特定されたことがなかったことから貴重な年代提示となった。

土製品のうち、土鈴・土玉・勾玉は宗教的な祭祀関連の遺物であり、土錘は漁撈などの生産に関連する遺物、羽口は鍛冶

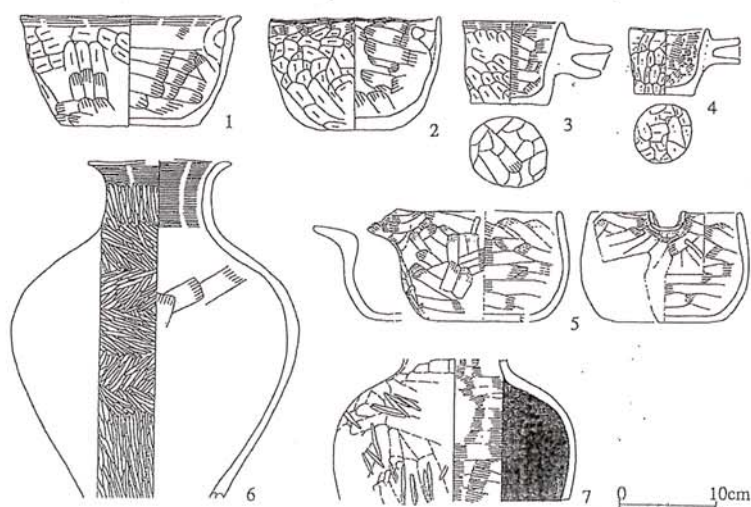


図6 高屋敷館遺跡の金属器写し土器

生産に関連する遺物である。

石製品の中では、基石と推定される黒色の石と白色の円形を呈する石（径1.7cm、厚さ0.7～1.0cm）が出土し、もし基石だとすると使用している住人の出自が気になるところである。砥石は比較的小型の製品が多く、鉄製品の加工や研磨に使用したと思われる。

鉄精錬工房付近から関連する遺物として鉄滓が多量に出土し、総数2万点、重量では300kgを越えている。また鍛造剥片は鍛冶遺構（火窪炉）から約10g出土している。

遺跡の最大の特徴は壕と土塁の存在とともに、環壕内から検出された竪穴建物跡をはじめとする遺構群と出土遺物の多様性にある

<sup>11</sup>。

**高屋敷館遺跡から考えられること** 遺構変遷図は、こ

れまで発掘担当者の畠山昇<sup>12</sup>や拙稿<sup>13</sup>（図7）で示してきたが、最近では岩井浩人の津軽地域における7～11世紀の集落消長分析と環壕集落分析<sup>14</sup>によって、より具体的な遺跡のあり方が見えるようになってきた。さらに高屋敷館遺跡環境整備の一環として木村淳一等による橋脚年代分析や未報告の土器にいわゆる「かわらけ」が存在することによって、高屋敷館遺跡の形成年代は11世紀を主体として、確実に12世紀まで継続することが理解され始めている<sup>15</sup>。

高屋敷館遺跡から出土した土器のうち最も特徴的で最も年代が新しいと考えられる土器は、片口土器（図6-5）である。第70号竪穴建物跡のカマド脇の床面から出土したもので、壁柱穴のみられる竪穴建物跡である。このことから11世紀以降の構築と考えられる。

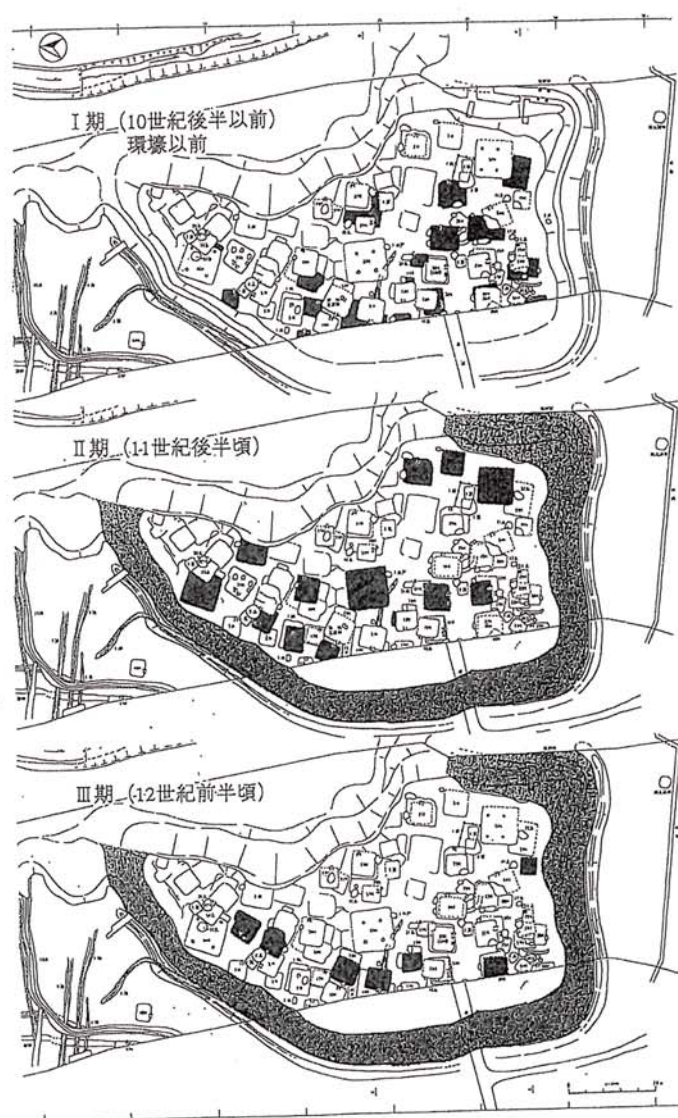


図7 高屋敷館遺跡の遺構変遷案



高さ 11.6 cm、推定口径 16.0 cmを測るこの土器は、内外面ともヘラナデの痕跡が明瞭に認められるとともに、実際の感触は、胎土も精選され表面を丁寧に磨いているため、まさに金属器を模倣した器であることを主張している。問題はこの土器の出自であり、機能である。

平泉におけるかわらけの用途と機能を分析した羽柴直人<sup>16</sup>は、12 世紀から始まる宴会儀礼の中で「瓶子」と「提子」に注目する。羽柴は八重樫忠郎<sup>17</sup>の分析を踏まえて、白磁四耳壺・渥美刻画文壺・常滑三筋壺・須恵器系陶器四耳壺は身分差を表象する「瓶子」と捉え、「12 世紀の平泉では白磁四耳壺を始めとすると倒卵型の体部に広い口を持つ器種のものを「瓶子」としていた可能性が高くなる」とした。その上で、壺とかわらけの間を中継する容器として「提子」を想定した。平泉の場合は青銅製の製品と考え、容器に付属する金具の出土を根拠としている。ただし、多種類の壺が存在するようになるのは 12 世紀中葉（1131 年以降）と考え、それ以前の状況についてはあまり触れていない。

仮に、高屋敷館遺跡の終末年代を、年輪年代に準拠して 12 世紀初頭にした場合、片口土器はこれ以前か同時期に搬入ないしは製作されており、片口土器を「提子」の模倣とみることとは大方の許しを得られるであろう。この問題は、高屋敷館遺跡から出土する広い口を持つ壺形土器にも関連してくる。この壺形土器の出自については、金属器模倣か、陶磁器模倣かまだ悩むところであるが、五所川原須恵器に特徴的な壺形土器の生産が終了（10 世紀後半～10 世紀末）していることから金属器・陶磁器いずれの模倣にしても、11 世紀段階では土師器で代用せざるを得なくなった結果と想定される。ちなみに、11 世紀後半の内耳鉄鍋は陣館から同時期の土器とともに出土しているから、山北三郡の煮炊具は鉄器に移行しており、鉄器煮炊具の需要があったにもかかわらず供給が少ない高屋敷館遺跡のような土地柄では、内耳土器を製作して代用するしかない。

ここで、北日本の土器様相と建物跡について説明しておく。松本建速は、エミシ社会を追求する一連の論稿<sup>18</sup>の中で土器を、土師器、ロクロ土師器、須恵器、擦紋土器の 4 つに区分し、ロクロ土師器と須恵器は需要と供給に基づく工人製作の流通品、土師器と擦文土器は自給的姿を残した家内製作品（主として女性の製作品）で、婚姻等によって製作技法が変化するとみている。特に 9 世紀以降に起こる津軽地域への「移住者」を前提に、土器の画期（9 世紀前半）もそれと連動しているとの考察は、前述水澤の考察に近似する。

さらに高橋学は「堅穴・掘立併用建物の成立と展開」という論考<sup>19</sup>の中で、津軽地域に分布の中心がある堅穴建物と掘立柱建物が軒を連ねる「併用建物」を分析した。その結果、北海道・東北・北陸に 141 遺跡が分布、時期も 7 世紀初頭から 11 世紀代に収まるが、特に 9 ～10 世紀に見られるとした。建物は伝統的な構築物であるから、人の移動とリンクする。

興味深いことに、横手市を中心とする山北三郡では、会塚田中 B 遺跡（11 棟）など 9 世紀初～中頃の年代に多いのに対し、津軽とくに浪岡地域では 9 世紀後半～10 世紀後半の年代で野尻（4）遺跡では 109 棟の建物を検出している。このように集落を営む場合の建物が時間を前後して移行している姿をどのように捉えるべきなのか。まさに「移住の痕跡」と見るべきかもしれない。

このように、9世紀代から始まった移住者が10世紀の熟成期間を経て11世紀の「壕のある遺跡」を構築したと考えると、高屋敷館遺跡から出土する遺物群は、生業の中に農業的文物（菰穂などの木製品や作物種子）、精錬・鍛冶の鉄生産にともなう工業的文物、錫杖状鉄製品・銅碗などの宗教的文物、土器も土師器とロクロ土師器そして金属器写しの土器など、遺跡そのものが在地に根を張った「交流センター」の機能をもっていたと考えざるを得ない。また「壕のある遺跡」から擦紋土器が出土することは、北海道の住人との交流も確実にあったとみなければならない。筆者は、本年10月に道南の擦紋土器を出土する遺跡、ワシリ遺跡（上ノ国町）では把手付土器・内耳土器、小茂内遺跡（乙部町）では壺形土器を確認（図8）しており、北奥の土師器文化遺跡と道南の擦紋土器文化遺跡では緊密な交流が行われていたと実感するに至った。

**浪岡館** 浪岡城跡は史跡指定の通り北畠氏の拠った戦国城館であるが、発掘調査によって戦国城館以前にも遺跡形成の痕跡が認められた。

『浪岡町史』第1巻（2,000年 浪岡町）ほかで示したように、主として出土遺物からの認識ではあるものの、9世紀から10世紀を中心とする時期（土師器・須恵器の出土）と、遺構は明確でないが生活の痕跡が残る11世紀から12世紀前半の出土遺物（把手付土器・内耳土器や擦紋土器など）がみられる時期である。そして後続する時期が12世紀後半（中頃とする見解もある）であり、内館の南西地域を中心にカワラケ溜まりの検出や共伴して白磁四耳壺・白磁玉縁碗・常滑甕・珠洲系甕などが出土している。

現在までこの時期の明確な遺構を把握できてはいないが、浪岡城跡の下層に存在する壕に注目できる。これは、西館南東部で検出された壕、北館・西館間の堀跡（二重堀の中にある堀残しの中土塁）に残存していた壕、そして北館南側に位置する12世紀後半のカワラケ



図8 ワシリ遺跡出土内耳土器（上）把手付土器（中手前）と小茂内遺跡出土の壺形土器



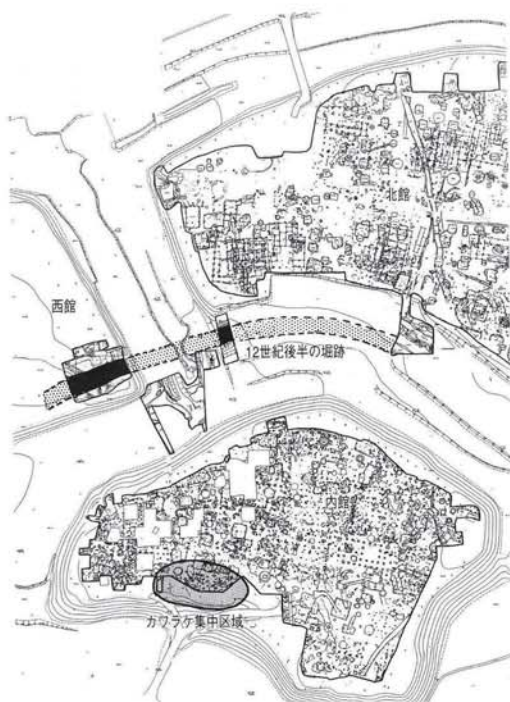


図9 カワラケの出土地と12世紀後半の堀跡

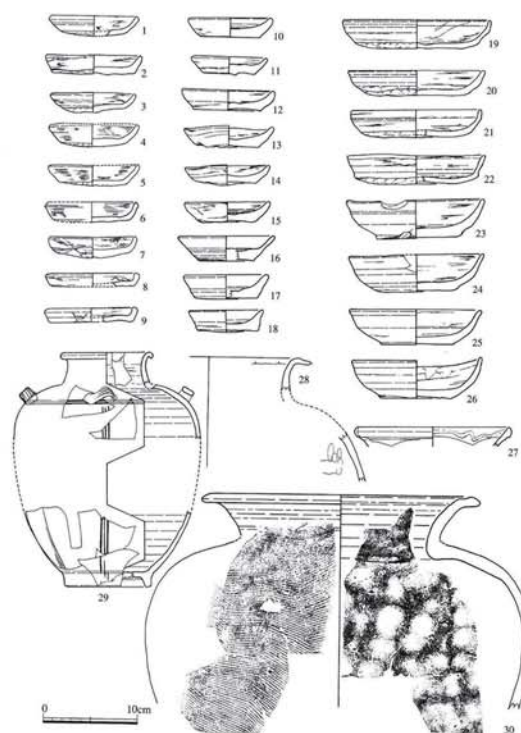


図10 12世紀後半の出土遺物

出土の壕である。この関係を示したのが図9である。さらに、12世紀後半の遺物の集中出土区域は内館南西部にあたり、壕はこのエリアから同心円的な形状を示す。

現在のところ津軽地域において12世紀後半の指標となるかわらけが100個体以上出土しているのは浪岡城跡内館しかなく、浪岡地域のみならず津軽地域における拠点的な遺跡であったことが知られる。特に、かわらけと共伴して出土した遺物の中には、中国製白磁四耳壺や同碗、常滑甕、須恵器系の甕などであり、まさに「平泉タイプ」と称することができる遺物の組み合わせである（図10）。

### 3 「曲輪を並べる」中世城館—浪岡城の姿—

現在調査中の金沢柵推定地（金沢城跡・史跡陣館遺跡）は、9世紀末葉から16世紀までの各時期の場の利用（遺跡）が確認されている。このような動きは、浪岡城跡の発掘調査でも出土遺物の面から確認できたが、最も大きな違いは15世紀から16世紀に構築された城館、浪岡城は北畠氏時代、金沢城は小野寺・六郷氏の時代にみられる城館構造の違いにある。これは景観的に、山城としての金沢城と、平城の浪岡城という城館類型の差異だけでなく、佐々木浩一が提示した「曲輪を並べる」タイプの城館<sup>20</sup>が存在するか、存在しないかという地域差異の問題も関係している。横手市域ではなかなか見ることができない城館なので、それぞれの城館を同一縮尺で並べておく（図11・図12）。

浪岡城跡は、北から南へ傾斜する扇状地上に位置し、南側を流れる浪岡川が天然の濠とな

っている。史跡指定面積は 136,123 m<sup>2</sup> で、東から<sup>しんだて</sup>新館・<sup>ひがしだて</sup>東館・<sup>きろがくだて</sup>猿楽館・<sup>きただて</sup>北館・<sup>うちだて</sup>内館・<sup>にしだて</sup>西館・<sup>けんぎょうだて</sup>検校館と史跡指定地外も含む北側の無名の館（外郭）の 8 か所の平場と、その間を回周する堀跡・中土塁<sup>21</sup>からなっている（図 13）。発掘調査は、北館と内館の全域と東館・西館・新館の一部、そして北館の周囲の堀跡を実施しているが、対象地は約 25,000 m<sup>2</sup>、指定地の約 19%で、環境整備は北館の平面表示を中心に中土塁の復元を行っている。

ほぼ平場全面を調査した北館の考古学的分析結果を中心に紹介する。

**築城期・廃城期** 浪岡城の平場がいつ頃構築されたのか、文献史料が少ないため諸説が存在した。長禄年間（1457～60）・応仁の頃（1467～69）・文明年間（1469～87）が主な説であった。考古学的には、出土遺物の年代を理解

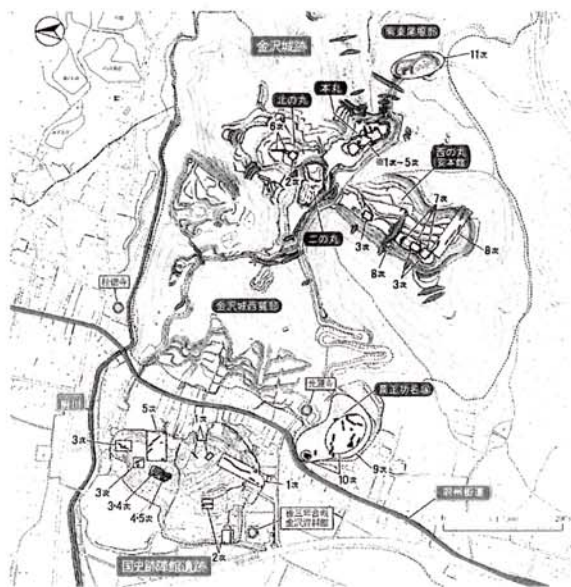


図 11 金沢城跡と陣館遺跡

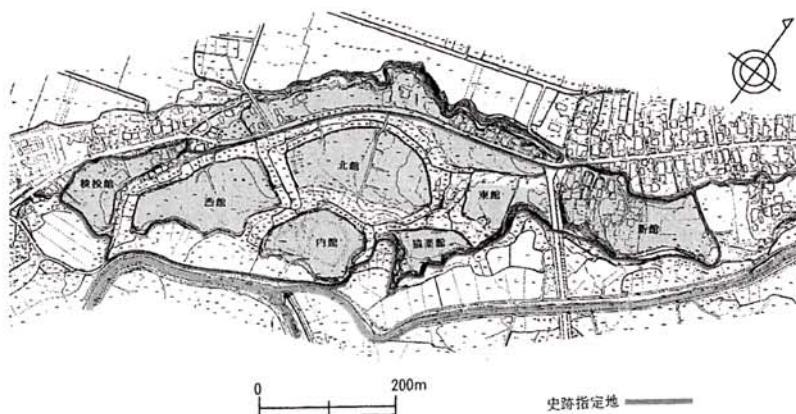


図 12 浪岡城跡全体図と史跡指定地



図 13 浪岡城跡空中写真（昭和 40 年代）



することによって、築城時期を推測できる。素材は陶磁器である。もちろん陶磁器は生産・流通・廃棄年代の幅があるため、絶対年代を決定することはできないが、出土量から考えることはできる。浪岡城の場合、中国製品・朝鮮製品・国産製品（瀬戸美濃・常滑・珠洲・越前・信楽・備前・唐津など）があり、時期も12～17世紀まで長期間にわたる生産品が搬入しているこ

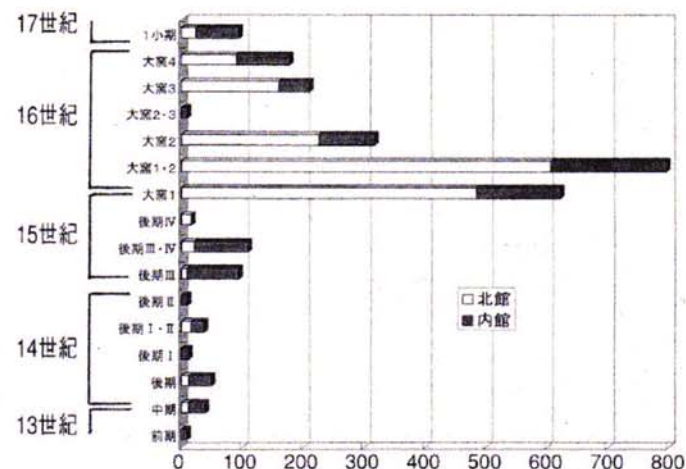


図14 浪岡城跡出土の瀬戸美濃製品破片数（藤澤良祐氏の鑑定）

とから、編年細分が進む瀬戸美濃製品の破片数からみる（図14）と、古瀬戸後期様式Ⅲ期から出土数が増え大窯1・2段階が圧倒的数量を示している。このことは古瀬戸後期様式Ⅲ期（1420～40）段階で城館整備が行われ、大窯第1段階（1480～1530）・大窯第2段階（1530～60）が城館の最盛期だったことを示している。最盛期は、遠藤巖氏が『浪岡町史 第二巻』（2004年 浪岡町）で示した16世紀中葉の浪岡御所の活動に対応している。落城期は、文献的に天正6年（1578）とする津軽側の記録と天正18年（1590）とする南部側の史料が存在する。しかしながら、登窯第1段階第1小期まで一定の数量が存在することから1610年代までは城館に居住した人々の存在が推測される。この結果は、唐津や備前の搬入とも連動して、文献の「落城」に対して城館の機能が失われる「廃城」との違いかもしれない。

**遺構分析の作業仮説** 遺構の年代決定は出土遺物に拠るが、出土遺物の無い遺構や年代決定の参考にならない遺物も多く、遺物の使用期間に幅がある場合（伝世品など）は遺構の重複関係を把握しても逆転があり得ることなどから、年代決定は困難を極めた。そのため、発掘された遺構の時期把握にあたっては、次の3点の仮説的作業をした上で、全体的な遺構配置を考えることにした。

- ① 遺構が廃棄される段階で、覆土中に入る遺物は、廃棄時以前の遺物であり、それを遺構の下限年代と考える。この場合は古い時期の廃棄でも、それ以降の廃棄時期に包含される可能性を有しているため、次の仮説②で補正する必要がある。
- ② 遺構の配置にあたっては、同一区域内（セットとして把握できる遺構群）での基本軸が類似すること、つまり景観的違和感がないものとする。
- ③ 遺構の存在が希薄な部分および溝などが走る部分は、道路・通路などに関連した区画施設と考える。

以上の仮説に対応して居住・生活の基本遺構である掘立柱建物跡（以下掘立という）・堅穴建物跡（以下堅穴という）・井戸跡（以下井戸という）という遺構のセット関係を重視し

た上で出土遺物の年代を加味して実測図（図 15）に対応した。出土遺物の中で編年を実施できるのは陶磁器だけであり、しかも数が限定されているから、以下の製品によって時期設定をした。

第 1 期（およそ 15 世紀第 3 四半期以前）……出土陶磁器の中で瀬戸美濃については、15 世紀後半以前と鑑定を受けた製品の出土する遺構で、大窯期の陶器を伴出しない。さらに、16 世紀代の指標となる染付端反皿・白磁端反皿・青磁線描蓮弁文碗を伴出する遺構は除外し、白磁内湾形小皿・青磁無文碗・珠洲播鉢については共伴可能として扱った。

第 2 期（およそ 15 世紀第 4 四半期～16 世紀第 1 四半期）……瀬戸美濃については大窯 I a・I b 期に限定し、青磁線描蓮弁文碗・白磁端反皿・染付端反皿・越前播鉢・甕の伴出も含めた。

第 3 期（およそ 16 世紀第 2 四半期～第 3 四半期）……瀬戸美濃については大窯 II a・II b・III 期に限定し、次の時期（IV 期）の特徴となる遺物群を出土しない遺構とした。

第 4 期（およそ 16 世紀第 4 四半期～17 世紀第 1 四半期）……瀬戸美濃については大窯 V 期以降の製品と、唐津製品、染付皿の中で口縁が内湾形の類、青磁線描蓮弁文碗の中で蓮弁の葉先を省略し単に縦位の線描だけになった類、そして備前が伴う遺構群。

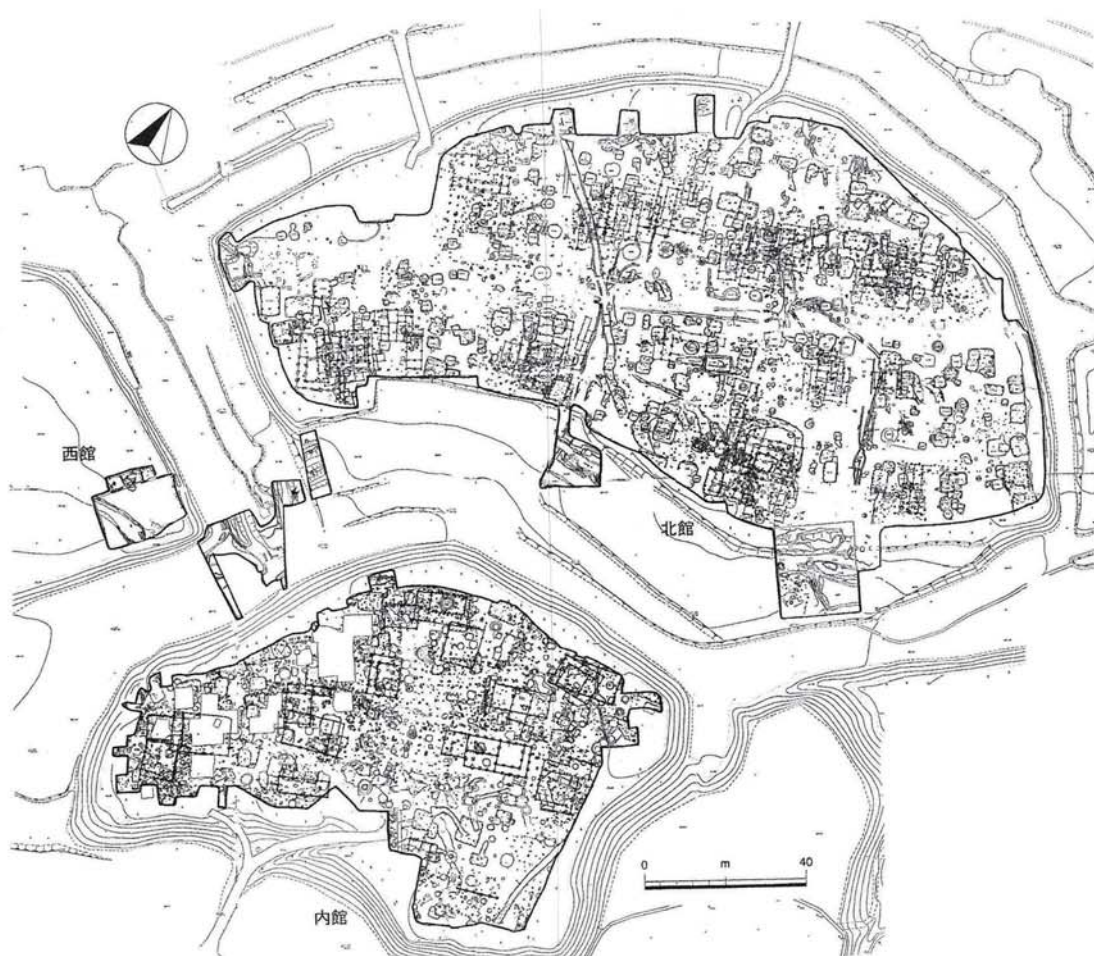


図 15 北館と内館の平面実測図（1977～1987 年の調査成果を合体）



以上の陶磁器による時期別配置を設定したところ、堀立については出土遺物による区分は無理な状況で、竪穴・井戸・他の遺構との重複関係・基本軸の方向による相違から考察せざるを得ない状況となった。なお4期区分の整合性は、すべての区域に合致するのではなく、5期・6期区分をしなければ遺構の重複関係を説明できない状況もみられたが、今回は4期区分に終止することにした。

さらに、小区画の性格を考えるためグリッド(10m四方)ごとに出土する各遺物の出土頻度を図16のごとく平面的に比較する手法を併用した。

**北館の時期別変遷** 北館の遺構は、掘立38棟、竪穴128棟、井戸69基を確認している。竪穴は重複していても同時期に認定される場合もあり、遺物の時期分類だけでは整合しない事態も出てきた。この場合は、軸線を考慮しながら、どちらかを新しい時期に設定しなおす必要があった。

なお仮説③において遺構の存在が稀薄な部分および溝等が走る部分を道路ないし、区画に関連した施設と

考える中で、たまたま北館の地籍図を見る機会があった。明治22年段階の地籍境界線は、当初は江戸時代における畑の区画を示すと単純に考えていたが、掘立と竪穴そして井戸をセット関係と見た場合、一種の区画地(屋敷地)を構成していると想定でき、この屋敷割想定線が地籍境界線に類似していることを発見できた(図17)。富樫泰時氏が台処館跡の復元を試みた作業と同じである<sup>22</sup>。この地籍境界線が屋敷境界であるか否か今後の検討課題として残し、仮説に基づく遺構配置の概要を述べる。

**北館1期の遺構配置(図18)** 1期のみの遺物を出土している遺構は4基しかない。後は、

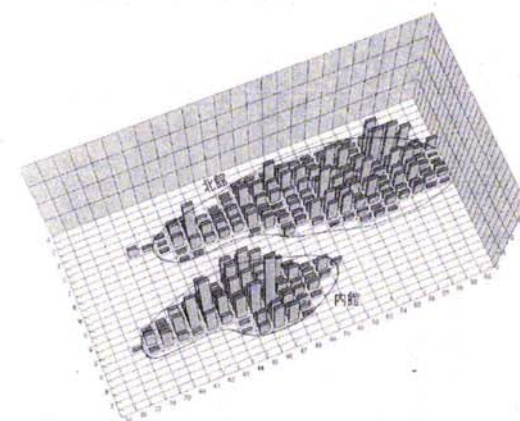
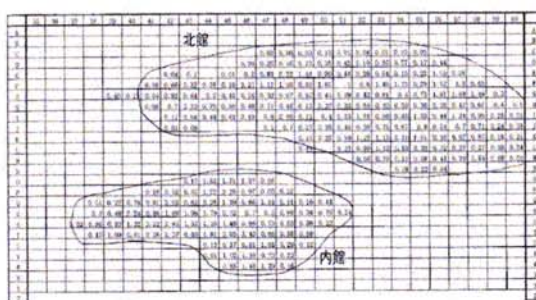


図16 浪岡城跡の陶磁器出土頻度(1㎡の破片数)



図17 北館の地籍図(明治22年頃作製)

遺構の重複関係から2期以前のものを抽出し、景観的に問題が無ければ提示するという段取りで進めた。その結果、掘立は8棟、堅穴は12棟を提示できたが、井戸に関しては確証をもてなかった。井戸の中で木枠を有するものは、それなりに長期の使用期間を想定できるため、2期・3期と重複して提示できるかもしれない。井戸を抜いて遺構配置を見た場合、本格的な屋敷地とみなすことはできないようである。堅穴についても掘立と連動する例は少なく分散的な配置となっている。南側2箇所認められる大型の掘立領域は、北館の当初施設として重要な位置を占めていたと想定される。掘立の長軸は南北方向を向くものが多い。

**北館2期の遺構配置(図19)** 2期になると、遺構の密度が格段に増大する。建物の軸線を1期と比較した場合、大型掘立の長軸方向はほぼ東西方向に統一される傾向がみられる。そして、掘立に規範する形で堅穴と井戸の配置が認められるようになる。南半部は4区画、北半部は5区画に分けることができそうである。このような区画が成立しているとすれば、北館には建物配置の規範が存在したことを示している。しかしながら、この時期ではブロックごとにおける出土遺物の相違や遺構の構造的な差異を明らかにできないため、可能性として考えられる武士の居住区と、それ以外の人々の居住区を分けることは無理である。問題は現状で認識できるこのような区分を、館の屋敷割と捉えてよいのかという点にある。

**北館3期の遺構配置(図20)** 3期は2期に引き続き区画の考え方が成立する。南半部は、4区画で、掘立がみられず堅穴と井戸だけの区画もある。北半部は5区画が可能である。基



図18 北館1期の遺構配置



図19 北館2期の遺構配置





本的な枠組みは2期と同じであるが、掘立の組合せが増え、竪穴だけの区画も存在する。この状況は、建物による住み分けがなされたとも理解できる状況となり、武士居住域でない部分は職人・工人居住域の可能性もある。

**北館4期の遺構配置(図21)** 4期はまさに浪岡城落城・廃城前後の状況であり、焼失したり破壊されたりした掘立の配置は見えづらくなっている。つまり竪穴と井戸の抽出が多くなり、2期・3期にみられた区画的な遺構配置は解体している状況となる。ただ遺構は少なくとも北館全域に広がっている様子を示していることから地籍境界線の規範は大枠で維持されているようで、井戸の数が多いことは、井戸を埋める廃棄儀礼が行われた可能性を示している。北半部中央の区画は際だって遺構が密集していることから、北館の最終的な居住性格(番城?)を示す遺構配置と考えられる。

**遺構変遷の意義** 以上、北館における遺構の概略を4時期の変遷案として示したが、1期と4期を除いた2期・3期は明らかに屋敷地的な遺構の配置を確認することができ、総括すると次のようになる。

1) 大型掘立は、1期段階で寝殿造系の様式を示すのに対し2期・3期は書院造系に変遷し、なおかつ同一地域に重複関係が存在する事から武家邸宅の機能を強く有する建物と推定され、それぞれの屋敷主の位置を示すと考えられる。

2) 小型掘立と竪穴については、倉庫・作業場等を伴う下人階層の住居と考えられ、大形掘立の位置に強く規範された配置は、その事を裏付けていると思われる。なお、掘立に関しては明確に倉庫と考えられる建物は存在せず、竪穴に関しても同様である。竪穴だけを配置するブロックに関しては下人や職人集団の居住区で、特に生産残滓である鋳型(図22)と埴塙(図23)の分布は鋳物師関連の居住区である可能性も高い。

3) 北館は基本的に「武家屋敷」とでも呼べる遺構群と把握できるが、鋳銅関連遺物の出土から、職人等も屋敷地に内包した構成を示し、決して近世的な身分差による居住域の区画を示しているものではない。ただし、内館に近い区画には、武家階層のなかでもより上位のものを配置していた可能性が高い。北館の南側にある一段低いテラス状の平場は、堀を埋めた上で3期以降に屋敷地として整備されている可能性が高く、北館の居住域が拡大したことを示すとみられる。3期の復元図が図24である。

図22 鋳型の出土状況

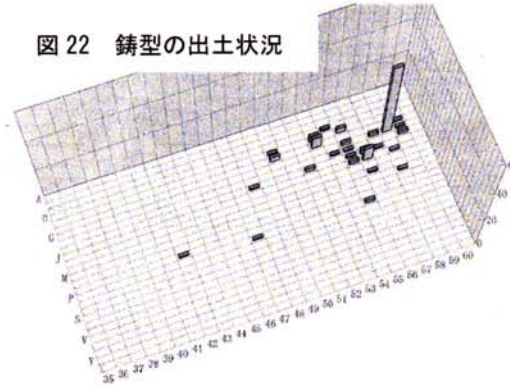
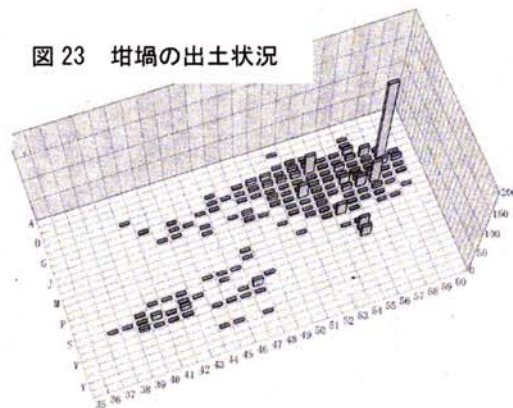


図23 埴塙の出土状況





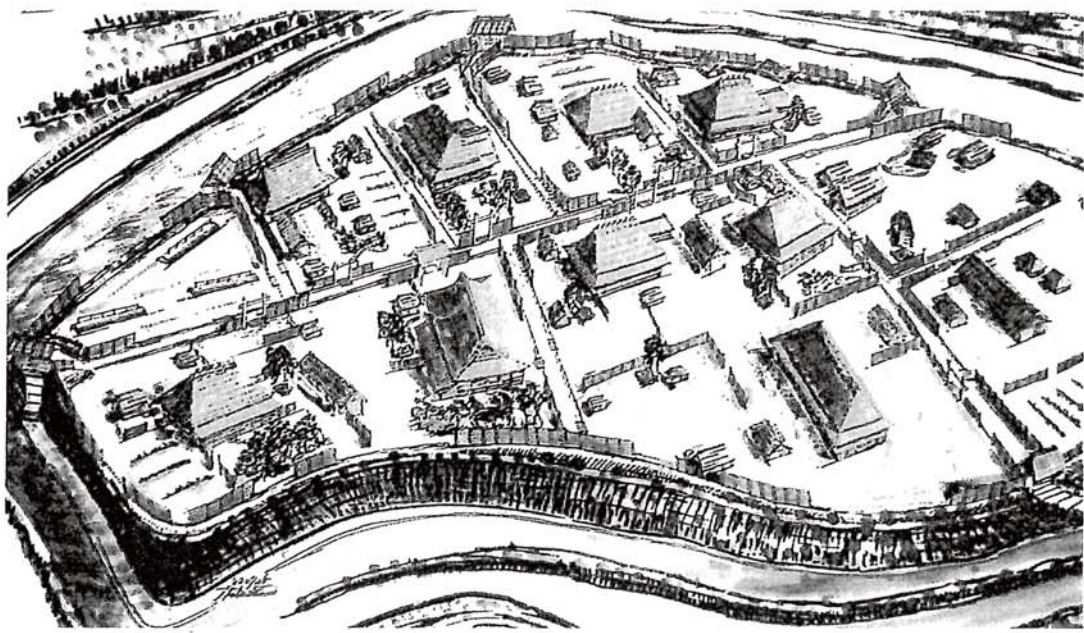


図 24 北館 3 期の復元図（高島成侑氏作製）

**浪岡城と城下** 浪岡城は奥大道と深い関係がある。図 25 外濱に至る奥大道ルートと関連する遺跡を示したものであるが、鹿角・大館を経て津軽平野に入ると 12～13 世紀の遺物が見られる遺跡は、かなりの数が発見されている。さらに、日本海ルートや糠部ルートにもこの時期の遺跡は存在し、古代とは違って大動脈となっている「道」の存在が想定

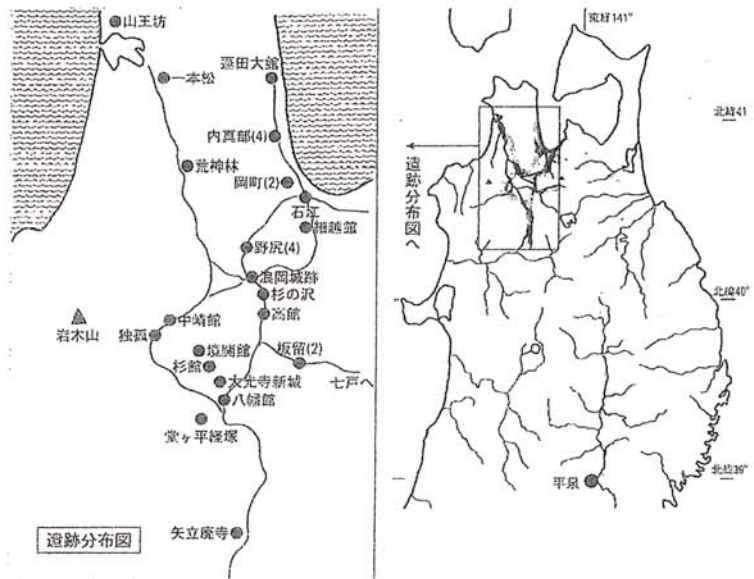


図 25 奥大道と津軽の遺跡

される。その中でも、浪岡城跡の位置に注目いただきたい。津軽平野に入った段階から大光寺・高館を通る乳井通りと境関館・中崎館を経る羽州街道は浪岡に到達し、ここから日本海側の十三湊方面へ北上する下之切通りと外濱（陸奥湾）へ向かう峠越えの大豆坂通りに分かれる（街道の名称は江戸時代の通称）。浪岡城跡はまさしく交通の結節地点であることを示している。この道程は、現在まで引き継がれる道であって、次に中世城館としての存在価値という面から浪岡城の城下も提示しておこう。



浪岡城の城下を考える場合、同時代史料はないので天和4年（1684）作成の「天和の絵図（九日町村・四日町村など）」写本を参考にするしかない。そこに現れた古城・浪岡城や周辺地名は伝聞・伝承を加味したものであっても浪岡城の残影を引きずっていると推測され、大正年間の地形図に位置の同定を行って記したものが図26である。

図の中に出てくる道は、基本的に大正5年以前のもので、九日町村を通る羽州街道（現国道七号）、四日町村を東西に走る乳井通り（現浪岡-大鰐線）、五本松村通る大豆坂通り（旧県道青森-浪岡線）は前述した奥大道時代の遺跡分布に対応する。浪岡城との関係でみると、検校館と西館の間にある堀道が大豆坂通りの幹線となり、城内は関所機能を有していた印象を受ける。また浪岡城の内館直下で合流する浪岡川・正平津川は、この時期（大正期の）農道を「留道」と記していることから城館期は河川が自然の濠であったことを推測できる。

さらに、田圃の地名をみると、浪岡城西側の一画は「あけつち」、その浪岡川対岸は「といた」、御八幡堂西側は「さひしろ」となっており、あけつちを「空け土」とすれば浪岡城の堀を掘り上げた土の場所、といたを「樋田」とすれば浪岡川や正平津川の氾濫原に樋を回して水捌けの良いように管轄した田圃、さひしろを「宿城」（現在の小字は淋城である）とすれば、城館の外辺の意味となる。そして城の周辺にある「九日町村」「四日町村」「七日町？」「川原町」の地名は六斎市の存在を示し、イカズチノ宮（現加茂神社）・御八幡堂（現浪岡八幡宮）・天王ノ宮（現広峰神社）・念仏堂とらんとう（現玄德寺：浄土真宗）・西光寺屋敷（現西光院：浄土宗）は現存する寺社に対応できる。験所寺・玄上寺・観音堂は現存しないが廃された宗教施設と推測でき、天和年間まで浪岡城下の姿は残存していた。



図26 天和の絵図から復元した浪岡城下



このようにみてくると、天和の絵図に記載された地名や土地の意味は、まったくでたらめではなく、浪岡落城後百年目の土地の刻印と考えることができる。さらに宗教施設と一体化した浪岡城下は、中世都市の一面を示していて、全国的な中世都市の形成状況に類似している。ちなみに津軽地域で見た場合、中世段階で都市的形成を示す遺跡としては、平川市の大光寺（新）城、五所川原市の十三湊遺跡、弘前市の堀越城などを挙げることができ、陶磁器の出土量という点からみると、15世紀前半までは十三湊が群を抜き、15世紀後半から16世紀前半は浪岡城が最も多い。単に発掘調査面積が広いだけでなく、浪岡城の北館・内館は単位面積あたりの出土頻度も高く、15世紀後半代の尻八館と双璧である。

**城館らしい遺物** 浪岡城の最盛期、15世紀後半から16世紀前半の北奥・道南をみると発掘調査された中世城館の比較検討が可能となっており、中近世の北奥史・蝦夷地史を考古学的にまとめた関根達人

の論考<sup>23</sup>に学ぶべきことは多い。中世段階、和人とアイヌが「共存」の関係にあったことを遺跡から発見された各種の遺構・遺物によって明らかにしたことは浪岡城の位置付けを考える上でも示唆に富むものであった。特に、ガラス玉・骨角器・アイヌ拵え刀・葬制に伴う墓・罎（鋳型）・シロシのある陶磁器などの考古資料が津軽海峡を挟んだ本州・北海道の両地域から出土していることには、大きな意味があると考えている。

このことともに、浪岡城をはじめとする中世城館・中世都市にしか見られず、それも

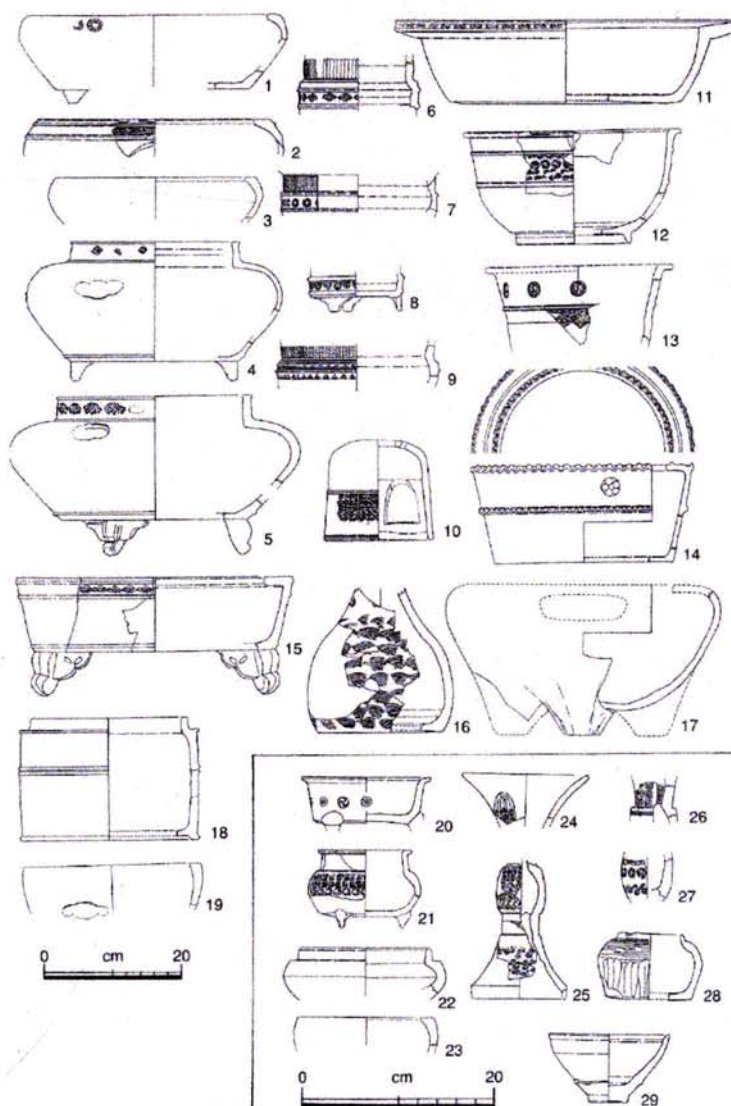


図 27 浪岡城跡出土の瓦質土器



階層性を伴って出土する遺物にも注目する必要がある。それは、水澤幸一が「瓦器、その城館的なもの」という論考<sup>24</sup>で指摘した瓦質土器で、火鉢・風炉・香炉などを主な器種としている。舶載・国産陶磁器は、碗・皿・壺・鉢などの器種で日常的に使用する生活財であるのに対して瓦質土器は、他者の視線を意識する一種の威信財的要素を有している。この瓦質土器は、浪岡城跡において顕著な出土量と多様な器種を示し、津軽海峡域では15世紀以降の主要な中世城館で出土している。

特に、浪岡城の多種・多量の傾向は、製作を依頼した特注製品の様相さえ感じるところで、その意味する所が気になる。図27に浪岡城跡出土の瓦質土器を示した（これ以外にも瓦質播鉢も多数出土している）が、火鉢には笹竜胆（5）、行火には巴紋（10）がスタンプとして施されて源氏である北畠氏らしさを示し、金属写しの燭台・花瓶（24・25）や天目茶碗の写し（29）の存在は、浪岡氏が京都方面へ出かけた際の情報に基づく発注意向が反映しているのかもしれない。遠藤氏が指摘する、「浪岡御所」たる遺物ではないのだろうか。

## 4 海（街）道と城館

「曲輪を並べる」タイプの城館のうち浪岡城・根城（八戸市）・大光寺城（平川市）などでは12世紀代の遺物が出土して、戦国期の城館であっても基層に環壕集落後の系譜を想定できる。環壕はなくても自然地形によって象徴的空間を構成している鰯ヶ沢町の種里城は典型的事例である。では、なぜ12世紀から16世紀まで、多少の断絶はあったとしても同じ立地に城館が成立するのだろうか。

おそらく、物資の流通ルート、道の存在が決め手となる、と考えている。

北日本では立地上、河川・街道に面した「河と道の城館」、海岸に面した「海の城館」、尻八館を代表とする「山の城館」が存在する。ここでは海（街）道のある城館に注目したい。

**中世城館の類型** 城館史を列島的に示した例として千田嘉博の論考<sup>25</sup>がある。これは「城下町の二元性」の項目で提示、①北海道＝チャシ型城郭、②東北－関東＝東国館屋敷型（東国群郭型）城郭、③関東－北部九州＝館型城郭＋機能分化型山城、

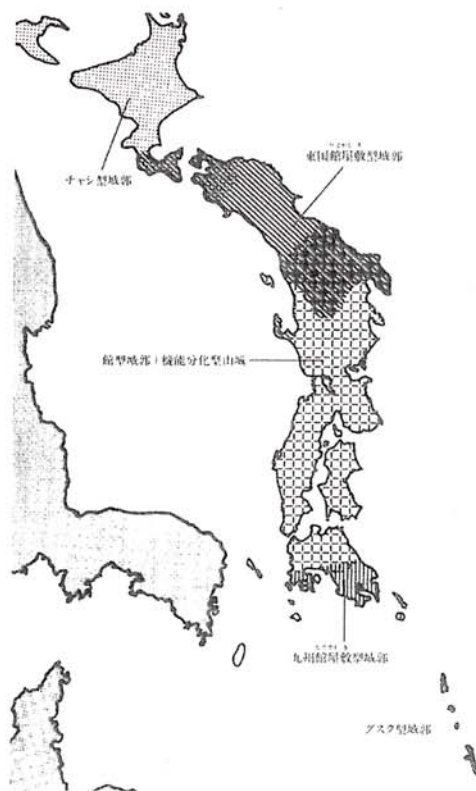


図28 戦国期城郭・城下の地域性（千田2000）

④南九州＝九州館屋敷型城郭、沖縄・南西諸島＝グスク型城郭の5類型に分けるものであった（図28）。

北奥地域をチャシ型城郭と重複させる問題点はあるが、東国館屋敷型として東北地方・北陸・関東・中部の一部を含む区分は、考古学の成果を踏まえた考え方で、「群立する巨大な堀に囲まれた曲輪（館）の中に、武士と直属商工業者が住む凝集した都市空間を形成した。だから城下の凝集域の拡大は曲輪（館）の付加として行った。そしてこれら館群の外に接して別に市場が存在した。」と分析する。「館型城郭＋機能分化型山城」は「中心に大型の館型城郭（中略）、隣接して溝囲みの矩形の屋敷が群立（中略）、城下凝集域の拡大は個々の屋敷が増えていくことで実現した。」とする。

このことを、模式化した小野正敏は、長年にわたる一乗谷朝倉氏遺跡の調査から、城館遺跡の構造（城下町）を列島の分析、二類型を提示した<sup>26</sup>。一つは一乗谷朝倉氏遺跡をモデル化した「同心円構造の城下町」（図29上）、二つは八戸市・根城跡をモデルとした「同心円の集合構造の城下町」（図29下）であった。佐々木浩一の「曲輪を並べる」Aタイプと「曲輪を重ねる」Bタイプ<sup>27</sup>の提示では、千田の「東国館屋敷型」と小野の「同心円の集合構造」がAタイプに対応する。もっとも、Aタイプを「求心性」のない配置とみる考え方に対しては、本堂寿一の批判<sup>28</sup>や、佐々木も曲輪の発掘調査によって主曲輪（扇の要）の存在を確認できるとの指摘もあって、曲輪配置から曲輪相互の階層性が希薄との指摘は当たらないとしている。

形態の違いが、自然地形も含め社会構造のどの部分を表象するのか見極める必要がある。Bタイプは、弘前市の大浦城と堀越城を提示した。

**北日本の城下町形成** 17世紀以降に弘前城をはじめとして近世城郭・城下町が形成されたことに異論はない<sup>29</sup>。それでは中世段階、城館と城下の関係はいつから形成されるのか、発掘調査事例などから見てみよう。

対象となる城館は、大光寺城・根城・浪岡城・聖寿寺館・堀越城などの研究が進んでいる史跡クラスであり、浪岡城は前述のため省略する。その視点は、城館域と街道・道はどのような関係になっているかである。

**大光寺城（図29）** 渡部学・齋藤正は、旧平賀町教育委員会の緊急発掘調査をもとに、城

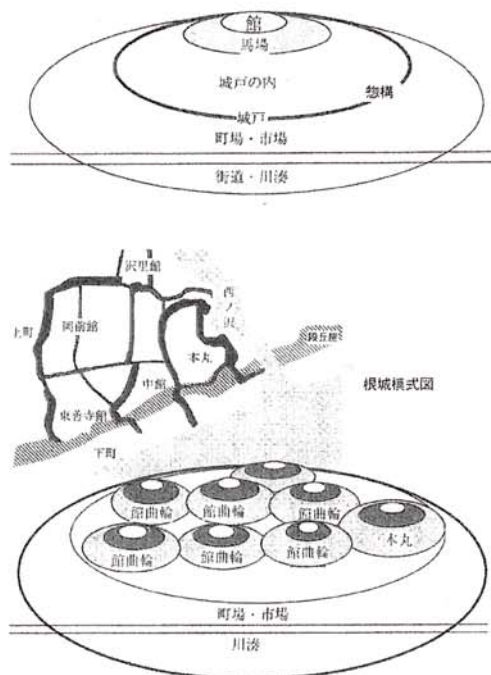


図29 上：同心円構造の城下町

下：同心円の集合構造の城下町（小野1997）



下の復元を試みている<sup>30</sup>。それによると、地籍図に見られる道は、城外から南北に走り城館域とされる北郭・主郭・南郭の中を通っていることを指摘。北郭の中には不動堂(1：牛頭天皇社)があり、そこから北では城外の観音堂(3：保食神社)へ向かい、南は南郭を出て八坂神社(2)境内方向に向かう道となる。近世段階の乳井通り(かつての奥大道と想定)は城館の東500mを北上する<sup>31</sup>が、城館内を迂回する街道も想定できる。出土遺物年代は、12世紀後半から17世紀初頭まで継続。

**根城(図30)** 佐々木浩一・大野亨は根城の発掘調査と地籍図を主体に城下復元をしている<sup>32</sup>。本丸・中館・岡前館・沢里館・東善寺館の城郭群の東に武家屋敷(職人城含む)、北の馬淵川側(下町)に直属集団居住地、南に寺社域、武家屋敷の東に町家を想定している。1760年代の「明和年中改根城図」に記載される、岡前館西側を通り沢里館にぶつかる三戸街道は、発掘調査によると堀跡となっていたことから、堀底を街道として使用することはないだろうと、否定的意見を表明している。しかし、沢里館には現在も観音堂が残る宗教的場所であるだけに、堀底を参道・街道として使用することは中世城館の勝地・象徴性から許容でき、歴史の道調査<sup>33</sup>でも是認している。出土遺物年代は12世紀代から17世紀初頭まで継続。

**聖寿寺館(図31)** 南部町教育委員会によって1993年(平成5)から調査を継続中。上下二段の平場から構成され、北・東側に堀跡、南西側は段丘斜面を利用して区画されている。上端平場中央から礎盤石を



図29 大光寺城の地籍と城域(齋藤ほか 2003)

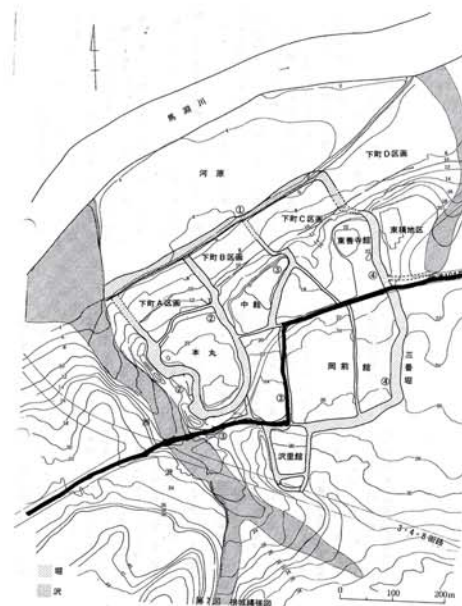


図30 根城の縄張り図(佐々木・大野 1994)

有する掘立柱建物跡が発見され、周辺は竪穴建物跡主体の分布域があるらしい。城下の構造は未定ながら、平場東側の堀跡を奥州街道が走っている<sup>34</sup>。堀跡の東側の調査が進んでいないため、どのような曲輪配置になるのか不明な部分も多く、また周辺の平良ヶ崎館・佐藤館・馬場館・小向館との関係も明確でない。ただ、八戸・根城から鹿角へ向かう街道とも接点を有することから交通の要衝であることは間違いなく<sup>35</sup>、城館北側で直角の折れが見られることは城館域を意識したものと考えたい。遺物年代は、14世紀から16世紀中葉。



図31 聖寿寺館と街道（布施 2017）

堀越城（図32） 齊藤利男らは、

『新編弘前市 資料編1（古代・中世）』（1995 弘前市）の中で本丸東側の土塁が存在しないことを城郭破却の痕跡と捉えた誤認（実際は礎石建物の門跡が存在）はあるものの、「天和の絵図」や地籍図を活用して、堀越城下の存在を肯定的に捉えた。これまでの城館内の発掘調査を総合すると、織豊期城館の特徴である礎石建物が存在し、さらに当地の城館では見られない威圧的土塁構築も認められるから、城下の整備も同様になされたと推測される。特に、福井敏隆が示した「貞享2年（1685）弘前并近郷之絵図」（青森県立郷土館蔵）と「惣がわ（惣構）」の指摘は重要である<sup>36</sup>。絵図には羽州街道沿いに町家と思われる描写があり、城館域の北と南に土塁（城戸と

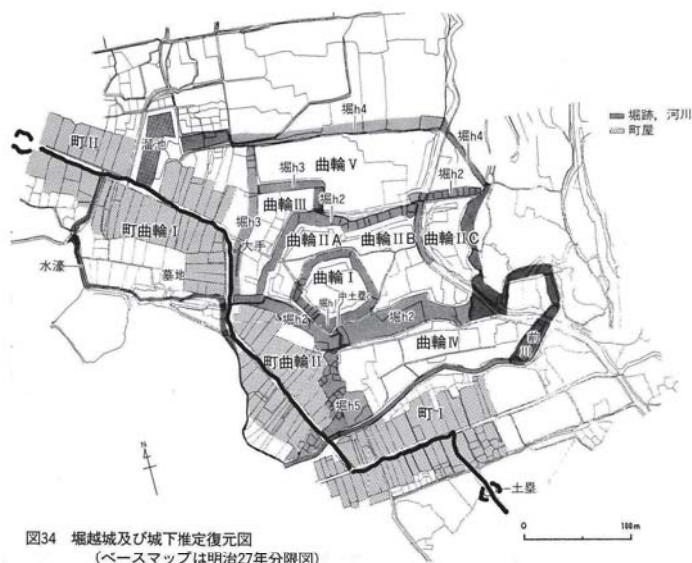


図34 堀越城及び城下推定復元図  
(ベースマップは明治27年分限図)

図32 堀越城の城下町（齊藤ほか 1995 より）



推定)が描かれる。これは一乗谷朝倉氏遺跡の街道・惣構を遮蔽・防御する上城戸・下城戸をイメージさせ、町曲輪Ⅰなどに見られる短冊形地割りは町屋であり、この中を羽州街道が通っていたと推測される。街道に添う町曲輪(町屋)を確認できる最初の例である。遺物年代は少量の14世紀代が存在するほか15～17世紀初頭が主体である。

**城館と道(街道)** 北奥の拠点的中世城館である「曲輪を並べる」タイプは、街道を城館域に取り込む事例、又は城館域辺縁に街道を誘導する事例が多くみられる。大光寺城では城館内を貫く道を、あえて誘導している印象を受け、城館西側に見られる短冊形地割りは16世紀末～17世紀初頭に形成されたかもしれない。また、根城・浪岡城は12世紀段階から道を意識した立地を示し、戦国期に至っても城域曲輪の辺縁に道を通して関所のあるいは流通拠点としての機能を窺うことができる。聖寿寺館も同様のイメージである。一方、堀越城のように「曲輪を重ねる」タイプは、町曲輪に街道を通すものの、城館域は通らない。このような道に対する変化は、武士階層の構造(階層)的面のみならず、城館そのものに対して民衆が抱いていた象徴性の変化、そして居住域の区分によってヒトの格差・差別を明示する構造へと変化したことを示す事例と考えられる。

## おわりに―城館をみる視点―

戦前、後藤守一は城塞の項目の中で、特に「東北地方の館(たて)」という一項目を設け次のように概述した<sup>37</sup>。

東北地方の随所に館(たて)と呼ばれる遺蹟を見る。多くは獨立丘か又は丘陵連亘中に聳立する丘頂に、不規則の塹濠を繞し、内部からは縄文式土器・須恵器・石器又は蕨手刀等を発見することがあり、古くから存した聚落の一であることを知るが、地形より見てかのアイヌのチャシの如く一の小邑城とすべきであろう、而してその同じ遺蹟から室町時代末期の鏡及び其他の金属器を発見することもあり、稀な例であるが基督教関係の遺物の出土をみることもあるので、これが戦国時代末期まで引きつづき地方土豪の城郭であつたことをも知ることが出来る。文献的資料も、亦此等の館が戦国時代の城郭たりしことを物語るものが多い。(下線筆者)

戦前における館に関する一般的な認識であり、古い段階は「チャシ」と同じ系譜につながっているとみている。しかし、堀や濠がいつの段階で構築されたものか明確にしていなくてもかわらず、戦国時代の「土豪城郭」も重複した遺跡形成をしているとして、考古学的編年をもたない記述となっていた。

ちなみに考古学史上有名な1936年(昭和11)の「ミネルヴァ論争」時、『ミネルヴァ』創刊号(1巻1号:2月発行)の中で、後藤は次の発言をする。

縄紋土器の終りの時代は地方的に<sup>あちこち</sup>夫々違いがあると思ふ。(中略) 喜田先生のいわれる鎌倉時代ということも地方によっては必ずしも無茶な議論じゃない(後略)

座談会の中で、「鉄器文化と石器文化は同時に併存して居たか否か」のテーマになった時の発言であり、対する山内清男は次のように言い返す。

それは一寸<sup>ちと</sup>點頭けないですね。縄紋式の末期、東北地方では亀ヶ岡式土器が一般的ですが、この影響と思われる土器やその他の遺物が関東にも、中部地方にも、畿内にもある。

(中略) これらは皆その地方に固有な末期の縄紋式に伴っているのです。決して弥生式とか、古墳時代に属しているのではない。

膨大な調査経験と明確な目的意識のもとに先史考古学に立ち向かった稀代の考古学研究者、山内清男の発言として肝に銘ずる言葉である。遺構と遺物を見る視点として考古学の「肝」であり、城館という遺跡を見る視点につながると考えている。

## 註

<sup>1</sup> 浪岡城跡の発掘報告書は1978年から継続していたが、総括的には工藤清泰ほか2004『浪岡町史』第2巻 浪岡町を参照願いたい。

<sup>2</sup> 拙稿1991「東北北半の城館—中世後期における—」『中世の城と考古学』新人物往来社

<sup>3</sup> 石井進1992「中世と考古学 地域研究の視点」『北の中世 史跡整備と歴史研究』日本エディタースクール出版部

<sup>4</sup> 京都大学文学部国文学研究室編1968『諸本集成倭名類聚抄〔本文編〕』臨戦書店では訓みを「太知(たち)」と「无路都美(むろつみ)」とあり「客舎」なりとする。また、白川静1989『字訓』平凡社では「たち(館)」と「楯(たて)」を同系の語と扱って、防御の意味を主としている。

<sup>5</sup> 大平聡1994「堀の系譜」『城と館を掘る・読む 古代から中世へ』山川出版社

<sup>6</sup> 城と館に関するコンパクトな概念解説は、齋藤真一氏の「城と館を解明する」(1993『新視点 日本の歴史第4巻 中世編』新人物往来社)がまとまっており、佐藤信・五味文彦編『城と館を掘る・読む—古代から中世へ—』(1994 山川出版社)の各論も参考になる。

<sup>7</sup> 岡本道雄1997「縄文時代の環濠、溝、柵列」『考古学ジャーナル』No.412 など

<sup>8</sup> 水澤幸一2009「序章 中世考古学の視点—本書がめざすもの—」『日本海流通の考古学—中世武士団の消費生活—』古志書院

<sup>9</sup> 拙稿1999「「館」発生の考察」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集 帝京大学山梨文化財研究所、他に拙稿1997「考古学研究における境界性…古代・中世への視点から…」『青森県史研究』第1号 青森県 もある。

<sup>10</sup> 拙稿2002「環濠集落とは何か」『奥羽史研究叢書3 平泉の世界』高志書院

<sup>11</sup> 青森県教育委員会1997 青森県埋蔵文化財調査報告書第243集「高屋敷館遺跡発掘調査報告書」、青森市教育委員会2006 青森市埋蔵文化財調査報告書第88集「国史跡高屋敷館遺跡環境整備報告書Ⅱ」

<sup>12</sup> 畠山 昇1999「高屋敷館遺跡について」『研究紀要』第4号 青森県埋蔵文化財調査センター

<sup>13</sup> 註9の拙稿および2000『浪岡町史』第一巻(浪岡町)でも示している。

<sup>14</sup> 岩井浩人2017「東北北部における古代末期環濠集落の構造と規模」『青山考古』第33号 青山考古学会・同2018「古代末期環濠集落の成立過程」『古代文化』第70巻第1号 古代学協会

<sup>15</sup> 木村淳一ほか2018『国史跡高屋敷館遺跡環境整備報告書Ⅲ』青森市教育委員会

<sup>16</sup> 羽柴直人2003「平泉におけるかわらけの用途と機能」『中世奥羽の土器・陶磁器』古志書院

<sup>17</sup> 八重樫忠郎1997「輸入陶磁器からみた平泉」『貿易陶磁研究』17号

<sup>18</sup> 松本建速2006『蝦夷の考古学』、2011『蝦夷とは誰か』、2018『つくられたエミシ』(いずれも同成社刊)

<sup>19</sup> 高橋学2019「竪穴・掘立柱併用建物の成立と展開」『北奥羽の古代社会—土器変容・竪穴建物と集落の



動態一』古志書院

<sup>20</sup> 佐々木浩一 2002「扇の要—東北地方北部における中世城館の曲輪配置—」『市川金丸先生古希記念献呈論文集 海と考古学とロマン』市川金丸先生古稀を祝う会

<sup>21</sup> 中土塁という言い方は、堀を二重堀にした場合の間にある掘り残し部分を指し、土塁という名称は不適切であるが、浪岡城跡で通称しているために使用している。

<sup>22</sup> 富樫泰時 2011「台処館跡の復元—発掘調査と地籍図の比較—」『前九年・後三年合戦—11世紀の城と館』古志書院

<sup>23</sup> 関根達人 2014『中近世の蝦夷地と北方交易—アイヌ文化と内国化—』吉川弘文館

<sup>24</sup> 水澤幸一 1999「瓦器、その城館的なもの—北東日本の事例から—」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告第9集』帝京大学山梨文化財研究所

<sup>25</sup> 千田嘉博 2000「戦国期城郭の地域性」『織豊系城郭の形成』東京大学出版会

<sup>26</sup> 小野正敏 1997『戦国城下町の考古学』講談社

<sup>27</sup> 註20と同じ

<sup>28</sup> 本堂寿一 1999「北の戦国城館跡発掘調査報告書を読む(1)勝山館・浪岡城・根城について」『北上市立博物館研究報告』第12号 北上市立博物館

<sup>29</sup> 長谷川成一 1993「本州北端における近世城下町の成立」『海峡をつなぐ日本史』三省堂

<sup>30</sup> 渡部学・齋藤正 2003「中世大光寺城跡の歴史景観」『東北中世考古学会叢書3 遺跡と景観』古志書院

<sup>31</sup> 荒井清明 1983『青森県「歴史の道」調査報告書 乳井通り』青森県教育委員会

<sup>32</sup> 佐々木浩一・大野亨 1994「地籍からみた根城跡〜下町地区を中心に〜」『八戸市博物館研究紀要第9号』八戸市博物館

<sup>33</sup> 橋本正信 1985『青森県「歴史の道」調査報告書 鹿角街道』青森県教育委員会

<sup>34</sup> 布施和洋 2017「三戸南部氏の城館変遷とその年代」『第4回南部学研究会—戦国大名南部氏と北奥の守護所・戦国城下町』南部町・南部町教育委員会、

<sup>35</sup> 佐藤仁・三浦忠司 1985『青森県「歴史の道」調査報告書 奥州街道(1)』青森県教育委員会

<sup>36</sup> 福井敏隆 2015「堀越楯の成立から堀越城の終焉」『堀越城シンポジウム—甞る津軽為信最後の居城—資料集』弘前市教育委員会

<sup>37</sup> 後藤守一 1937『日本歴史考古学』四海書房 P284-285